



Title	書店や図書館での展示は研究や研究者への親近感を高めるか : 地域連携によるブックフェアにおける予備的分析
Author(s)	佐藤, 侑太郎; Sato, Yutaro
Citation	科学技術コミュニケーション, 38, 59-74
Issue Date	2026-03
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99292
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99292
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_38_05_sato.pdf



ノート

書店や図書館での展示は研究や研究者への 親近感を高めるか ～地域連携によるブックフェアにおける予備的分析～

佐藤 侑太郎¹

Does an Exhibition at a Bookstore and Public Libraries Increase
Viewers' Familiarity with Research and Researchers?:
A Preliminary Analysis of the Impact of a Book Fair in Collaboration with a
Local Community

SATO Yutaro¹

要旨

科学コミュニケーションの一環として、研究者がおすすめる本の展示など、書籍に着目した取組みを多くの研究機関が実施している。このような取組みは、一般の方にもなじみ深い書籍という媒体を通して、研究や研究者をより身近に感じてもらう効果が期待されるものの、取組みの効果を検証し報告した例は少ない。そこで本研究では、書店・図書館に研究者の著書や推薦図書、研究者紹介のポスターを展示する取組みにおいて、鑑賞者を対象にアンケート調査を実施することで、展示によって研究や研究者に対する親近感に変化が生じたかを検証することを試みた。3つの会場で計38件の回答が得られ、回答者のおよそ6割が展示を見て研究や研究者をより身近に感じたとは回答した。回答者のおよそ9割は展示のことを知らずに会場に来て偶然展示を見つけたと回答した。本研究では、学術書やコミックスといった幅広い種類の書籍のうち個々の書籍が及ぼす影響を検討できなかったこと・ポスター展示には書籍とは関係のない情報も含まれていたこと・アンケートの回答数が少ないことから書籍展示の効果は断定できない。本稿では、今後の取組みの参考となるよう、予備的なデータを報告する。

キーワード：アウトリーチ、書店、図書館、推薦図書、学術書

ABSTRACT

Research institutes often engage in exhibitions of books as science communication. These exhibitions can disseminate research activities and researchers' personalities through books, which are familiar to general citizens. Thus, book exhibitions are expected to help citizens become more familiar with research and researchers. However, only a few studies have investigated the impact of book exhibitions. Using a questionnaire survey, we examined whether an exhibition consisting of researchers' books, recommended books, and posters to introduce researchers has an impact on citizens' perceived familiarity with research and researchers. In total, we collected 38 responses

2025年5月8日受付 2026年1月27日受理
所 属：1. 新潟大学経営戦略本部UA室
連絡先：yutaros.ed@adm.niigata-u.ac.jp

from three venues. Approximately 60 percent of respondents indicated that the exhibition helped them become more familiar with research and researchers. About 90 percent of the respondents indicated that they did not know about the exhibition beforehand and found it at the venue incidentally. We could not identify the effects of the book exhibition for three reasons: 1) we did not distinguish between a variety of books, such as academic ones and comics; 2) the poster exhibition included information irrelevant to books; and 3) only a small number of visitors answered the questionnaire. In this note, we report preliminary data, which will feed into future similar exhibitions.

Keywords: outreach, bookstore, library, recommended book, academic book

1. 序論

1.1 研究機関による書店・図書館での展示

書店や公共図書館に研究に関連する本や研究者の推薦図書を表示する取組みは多くの研究機関によって実施されている。たとえば理化学研究所は、所内の研究者や職員へのアンケートをもとに選書した科学に関する本を書店に展示する「科学道 100 冊フェア」を広く展開した（理化学研究所 作成年不明）。東北大学は公共施設で実施したイベント「脳カフェ」に合わせて、同建物内の図書館に脳科学に関する本を展示した（長神 2009）。このような展示は、書籍という一般市民にもなじみのある媒体を通して、科学や研究の魅力を普及するのに有効であると考えられる。

研究者に親近感をもってもらうために研究者の人柄が垣間見える情報を付して発信することは多いが、推薦図書もそのような情報として機能することが期待されている（例：坂東 他 2015）。たとえば京都大学は、対話を通じて幅広い人々に研究の魅力を伝えるためのイベント「京都大学アカデミックデイ」を実施している。このイベントでは、来場者がポスターの前で研究者と立ち話をしたり、ちゃぶ台を囲んで対話を楽しんだりする。この会場の一角にある書店にて、研究者の推薦図書も展示したところ、来場者からは研究者のパーソナルな部分がみえる展示があると話のきっかけになりやすいという声があった（大西 他 2024）。九州大学は、脳科学に関するサイエンスカフェ「Qcafe2009『脳シリーズ』」に連動して、研究者の「子ども時代」に焦点をあてた展示「Qcafe2009 サイエンスギャラリー」を書店にて実施した（坂倉 他 2012）。この取組みでは、研究者が子どもの頃に好きだったことなどを紹介するパネルや子どもの頃に読んでいた本や絵本、実験器具や玩具などが展示された。こうした工夫により、科学や研究者に対する敷居を下げることで来場者に親近感をもってもらえること、研究者が学生や子どもの頃に読んだ本がそのような効果に貢献したことが示唆された（坂倉 他 2012）。このように、書店や公共図書館での本を中心とした展示は、研究活動や研究者について一般の方に広く知ってもらううえで一定の役割を果たしてきた。

サイエンスカフェのようなイベントには、もともと科学・技術への関心が高い方が参加する傾向があることが知られている（加納 他 2020）。書籍に焦点をあてる展示には、より広い層に研究や研究者に対する関心を喚起する可能性がある。たとえば、学術的な本だけでなくコミックスや一般書など一見研究とは関係がなさそうな書籍も含めて展示すると、科学・技術への関心が高い層以外にも関心をもってもらいやすいと考えられる（早川 2014; 加納 他 2013; 大西 他 2023; 内田 他 2011）。イベントに参加するためにわざわざ研究機関に足を運ばない方であっても、地域の書店や図書館など、行動圏の中に展示があれば偶然立ち寄ってくれるかもしれない（大西 他 2024; 坂倉 他 2012）。とくに公共図書館は、科学館や博物館とくらべると施設数が多く、科学技術への関心が低い層にも利用されやすいことから（早川 2014）、科学・技術の普及の場となることが期待される。

書籍に着目した展示は地域における読書文化の醸成にも寄与する。『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（第5次）』（p.6-7）では、子どもが文学作品や科学に関する書籍や資料を読むことで、学びの楽しさを感じ探求心を深めることができる点に改めて言及された（文部科学省 2023）。第19期日本学術会議第4部の審議報告『科学・技術を文化として見る気風を醸成するために』では、「科学は、真を追求する点で、文学、音楽、絵画と同じ文化」（同報告要旨より）であるという立場から（同様の認識は初田 他 2021 にもみられる）、研究成果の社会実装による直接的な貢献以外の科学の重要性が指摘され、理学振興研究連絡委員会は理数系の良書を普及するために推薦図書リストを作成した（日本学術会議第4部 2005）。実際に、子どものころから百科事典や図鑑などが身近にある環境にいて理科や科学に興味をもちやすくなることを示唆する報告がある（早川 2014）。公共図書館において研究機関による書籍展示を実施することで、普段は目にしない、あるいは手にしない本に出くわす機会にもなる（長神 2009）。書店や公共図書館における展示は、読書文化の推進や読書を通じた科学普及とも軌を一にするものである。

科学普及の役割を担う施設の筆頭である博物館は「日常的に文化として科学を楽しむ場」（小川 2023 p.161）として機能している。書店や公共図書館で研究機関が展示をおこなうことで、書店や図書館にも同様の機能が拡張されるといえる。このことは、いわゆる理数系の科学だけでなく、あらゆる分野の研究にあてはまるだろう。次節で詳述するとおり、人文社会科学系の研究において書籍はより重要な役割を果たしており、書店や図書館における書籍に着目した展示は人文社会科学系の研究とも相好性である。人文社会科学系のアウトリーチは発展の余地が大きい（池田 他 2016; 大窪 他 2013）、書籍に着目したアウトリーチは親和性の高い手段の一つであると考えられる。

なお人文学のコミュニケーションを「人文知コミュニケーション」と呼ぶ潮流もある（光平 2023）。一方で近年の科学技術コミュニケーションをめぐる議論では「…必ずしも「科学技術」を前面に押し出さずに、社会課題や ELSI を起点にした、文系・理系を問わないコミュニケーションの在り方…」に言及されているほか（文部科学省 2025）、人文社会科学系の内容であっても「科学コミュニケーション」の語が使用されることもある（小林 2024; 大窪 他 2013）。後述のように本研究の対象となる展示には人文学以外の分野も多く含まれることから、本稿では「科学コミュニケーション」の語を用いる。

1.2 学術書を展示する意義

研究者による学術書の出版は、とくに人文社会科学系においては研究活動そのものの中核をなす活動である（Cambridge University Press and Oxford University Press 2019）。学術書を執筆する過程で複数の研究成果を体系的にまとめて精緻化したり、過去の研究を顧みて相対化したりするなかで、自身の研究関心や今後の展望を再確認したり新たな気づきを得たりしながら、まとまったストーリーのかたちでしか伝えられない知識を普及することができる（佐藤 他 2011; 三中 2021）。自らの依拠する学問分野の歴史を遡り、その礎を確認することは、研究領域を越境する端緒をも生みだし得る（三中 2021）。学術書の出版は、研究者としての生きがいの充足やセルフ・アイデンティティの獲得・維持にも寄与するだけでなく（佐藤 他 2011; 個別的なエピソードは春風社編集部（編）2022）、学術コミュニティ内での評価（佐藤 他 2011）や社会的評価にもつながる（荻谷 2020）。

日本では他の研究者による査読が学術書の出版を決定づけることは少ないため、学術論文で広く採用されているような査読性のもとでは引き出されないような革新的な知識を発信する潜在性を学術書は有している（橘 2016）。既存のパラダイムを超える研究を総合的・体系的に発表することは既存の学術誌への論文投稿では難しいため（鈴木 他 2015）、学術書が既存の学会の枠組みを超える斬新な成果の出口になることもある（松本 2020）。また学術書は、当該分野における主要文献の題

目を網羅的かつ詳細に集約する資料としての価値も有する (三中 2021; Cambridge University Press and Oxford University Press 2019). このように、学術コミュニティにおいて学術書は論文等とは異なる形で研究の発展に寄与してきた。

科学コミュニケーションの取組みとしては、研究者の推薦図書に比べると、研究者自身によって書かれた専門的な「学術書」に焦点が当てられることは相対的に少ないように思われる。いわゆる学術書は、一般の方には、堅い・難しい・自分とは無関係といった印象を与え得る。しかし学術書は、自身と同じ専門領域に属する研究者だけでなく、隣接領域の研究者や当該分野の関係者を中心に領域を超えてやや広い読者層に体系的知識を伝播させるように書かれたものである (鈴木 他 2015; 橋 2016; 佐藤 他 2011)。したがってその読者層は必ずしも学術コミュニティ内に限定されず、一般の方にとっても、社会問題について考えるための素養となる哲学を培う助けになるものもある (鈴木 2020)。実際に手にとって熟読するかどうかによらず、一般書から学術書まで様々な分野の本が並んだ展示は「背表紙読書」(渡邊 2017)をつうじて様々なテーマに触れ自身の関心を広げる機会にもなるだろう。学術書に光を当てる展示によって、研究活動の中身を詳細に伝えられるだけでなく、学術書出版という文化にも広く目を向けてもらう契機になることが期待される。

1.3 目的

新潟大学は、研究者の著作や推薦図書、研究者紹介のポスターを展示する『新大ブックフェア 2024 一本で身近に。大学の研究一』を大学構内や地域の書店・図書館にて実施した。この取組みでは、新潟大学の研究や研究者を、新潟市の方々、とくに高校生に、より身近に感じてもらうことを企図した。前述の各研究機関による取組みの潮流を受けるものであるが、本取組の特長として大学図書館や大型書店にくわえて多くの地域の図書館でも展示を実施したことが挙げられる。

一般に科学コミュニケーションのためのイベントは学術的研究の組上へのりづらいため、コミュニティ内で知見の蓄積がされにくいことが課題である (奥本 他 2022)。書店や公共図書館での展示はいくつかの研究機関で実施されているが、その実践を文献として報告した例は少ない。上述の例 (大西 他 2024; 坂倉 他 2012) 以外では、大学図書館において実施した推薦図書の展示に対する学生のコメントをテキストマイニングで分析した例 (安光 2022) があるが、このような報告はアウトリーチの取組みをデザインするうえで不可欠である。

そこで本研究では、3つの会場において鑑賞者へのアンケート調査を実施し、展示によって大学の研究や研究者への親近感に変化が生じたかを調べた。またどのような方が書店・公共図書館での展示に関心をもってくれるかを探索するため、過去の研究でも用いられている、科学・技術への関心度合いに着目した。本研究の問いは、書籍に注目した書店・図書館における展示は科学・技術への関心が低い層にも関心をもってもらえるか、また展示の鑑賞者に研究や研究者をより身近に感じてもらうことができるか、の2つである。本稿の目的は、展示の効果検証の試みを報告することで、今後の同様の取組みに資する知見の蓄積に寄与することである。なお、展示自体の概要や実施経緯などの詳細は別に報告したので、興味のある読者はそちらを参照されたい (佐藤 他 2025)。

2. 方法

2.1 展示物

新潟大学に所属する研究者9名 (以下、研究者) に、展示するポスター等の原稿や書籍リストを作成してもらった。研究者の研究分野は、教育学・文化学・社会学・考古学・経済学・健康科学といった人文社会科学系にくわえて、神経科学・生物学といった自然科学系の分野も含む。研究者9

名に、ポスター原稿と推薦図書リストを含む様式 (Microsoft Word ファイル) への記入と、直筆ポップ文・研究を表す写真・顔写真の画像ファイルの提出を依頼した。研究者が出版に携わった書籍 (分担執筆等も含む: 以下、著書) のリストは第一著者が作成して様式ファイルにあらかじめ記載しておき、研究者本人に確認・追記を依頼した。推薦図書のリストは、以下のような指示書きで作成を依頼した: 「これまで読んだ本で、影響を受けたものや一般の方 (成人・高校生程度) におすすめの本 (一般書・小説・コミックス・絵本等も幅広く含む) を 5~10 冊程度教えてください」。得られた研究者 9 名分の著作・推薦図書計 159 冊をまとめたリストを書店・図書館の担当者に共有し、各会場の都合に合わせて展示する書籍を選定してもらった。内訳は表 1 に示し、書籍リストは新潟大学 URA ウェブページにて公開した (新潟大学 URA 2024)。

研究者紹介ポスターの内容や体裁は、科学技術振興機構の『JST-news』を参考にした (科学技術振興機構)。ポスターの内容は、自身の研究の紹介 (『どんな研究?』)・研究者になろうと思ったきっかけや経緯 (『なぜ研究者に?』)・自身の研究と社会や生活ないし他分野の研究との関連 (『暮らしとはどう関係する?』) の 3 項目が主であった (図 1 左)。3 項目について、各研究者に 160 字程度で寄稿を依頼した。くわえて、各研究者の著作と推薦図書の各 1 冊ずつ計 2 冊について、手書きでコメントを執筆してもらい、その画像データを提出してもらった。顔写真 (似顔絵含む) と研究活動を表すような写真の提供を依頼し、それぞれポスターに掲載した。本人の顔写真 (安光 2022) や手書きのメッセージ (浅井 他 2015) を含めることで、展示の鑑賞者に親近感をもってもらうことを期待した。実際、手書き文字は書き手の人柄についての認知に影響することが知られている (新垣 他 2009; ただし書籍ポップが手書きか否かで書籍への注意や評価が大きく変わらないとする研究もある: 後藤 2013, 2014)。研究を表す画像は可能な限り数点の提供を依頼した。1 点をポスターに掲載し、それ以外は別途パネルとしてポスターの脇に展示したほか (新潟県立図書館)、期間途中から小さく印刷したものを書棚に貼る (ジュンク堂書店新潟店) などして活用した。ポスターは目立つ色を複数使用することでより多くの方に足を止めて見てもらえるようにした。安光 (2022) でも展示にパステルカラーが用いられ、興味を惹く一因になったことが示唆された。ポスターに使用したのと同様の顔写真と『どんな研究?』欄の原稿を用いて、研究者紹介ポップ (図 1 右上) を作成した。また、ポスターに使用したのと同様の手書きコメントデータを用いて、著書と推薦図書のそれぞれについて書籍ポップ (図 1 右下) を作成した。書籍にポップを合わせて展示することで、鑑賞

表 1 展示候補書籍の内訳。著書は専門的な学術書が多く、推薦図書は学術的な内容のものから一般書、コミックス等も含む。

研究者の研究分野	著書	推薦図書	計
教育学 1	18	7	25
教育学 2	1	6	7
文化学	32	11	43
社会学	7	12	19
考古学	9	4	13
経済学	9	10	19
健康科学	2	1	3
神経科学	3	9	12
生物学	10	8	18
総計	91	68	159

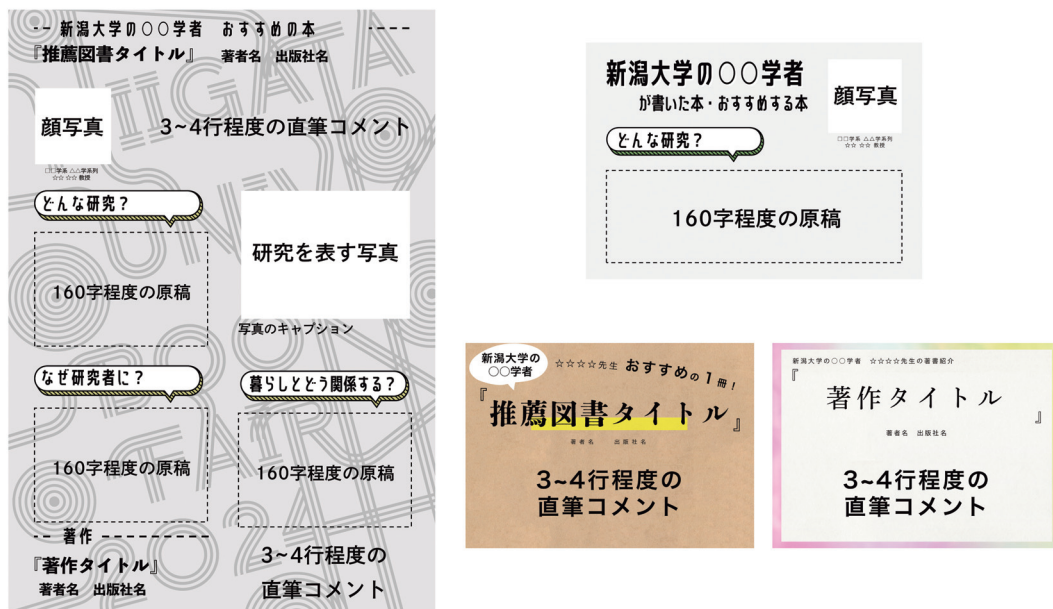


図1 展示物のイメージ。(左) 研究者紹介ポスター, (右上) 研究者紹介ポップ, (右下) 書籍ポップ。

者が書籍を手にとりやすくなることが期待される (後藤 2013)。ポスター・ポップの実例を図2に示した。

2.2 場所・期間

展示は新潟市内の書店・図書館など計19ヶ所の会場で実施した。展示内容や規模は各会場の規模によって大きく異なる(書籍展示の風景や展示詳細は新潟大学 URA (2024), 佐藤 他 (2025) を参照)。本研究では、そのうち展示規模の大きかったジュンク堂書店新潟店・新潟県立図書館・新潟市立中央図書館ほんぽーとの3つの会場で実施した(表2)。これらの会場では、書籍やポップは書棚に展示し、研究者紹介ポスターは書棚から離れた、人の行き来がある開けたスペースに展示した。アンケートの実施期間はポスター展示の期間と同様である。

ジュンク堂書店新潟店は、2フロア計5,280 m²にわたり広範な分野の書籍を取りそろえる、新潟市内の大型書店である(honto 作成年不明)。学術書等を扱うフロアにある3つの書棚に、研究者の推薦図書と著作が計74タイトル展示された(各タイトルについて数冊ずつ陳列)。同フロア内の同店敷地外に、エスカレーターやカフェの座席が設置されているスペースがあり、ときおりサイエンスカフェなどのイベントに使用される(サイエンスカフェにいがた 作成年不明)。書棚の展示からは歩いて数十秒程度の近さであった。このスペースに研究者紹介ポスターを展示した(なおこのスペースは厳密にはジュンク堂書店新潟店ではないが、以下では便宜上ジュンク堂書店新潟店と呼ぶ)。ポスターはスチレンパネルに貼付けて自立式展示ボードに吊り下げる形で展示した。

新潟県立図書館は大正4年に創設され、約96万冊の蔵書・資料を有する新潟市内の大型図書館であり、1日に1,000人程度が来館する(新潟県立図書館 2024)。図書館閲覧室の入り口付近の台に平置きするかたちで書籍10冊程度が展示された。書籍が貸し出されてスペースが空いたときには、別の書籍で補充されることもあった。ポスターは、正面玄関そばにあるギャラリー展示コーナーで展示した。展示スペースに余裕があったため、研究者に提供してもらった研究を表す画像を別のパ



図2 実際の展示物の例。(左) 研究者紹介ポスター、(右上) 研究者紹介ポップ、(右下) 書籍ポップ。

表2 会場ごとの展示期間。前後に設営・撤収日を別に含む場合がある。同一会場内でも、書棚での書籍やポップの展示と、別スペースでの研究者紹介ポスターの展示は、開催期間がずれている場合があった。このような場合、ポスター展示の方の期間をカッコ書きで示した。

会場名	期間
ジュンク堂書店新潟店	10月27日-12月8日 (ポスターは10月23日-11月11日のみ)
新潟県立図書館	11月6日-12月1日 (ポスターは11月20日-12月1日のみ)
新潟市立中央図書館ほんぽーと	11月7日-1月9日

ネルとしてポスター協に展示した。

新潟市立中央図書館ほんぽーとは3フロアのべ9,132 m²の敷地面積を有する大型図書館であり(新潟市立中央図書館 作成年不明)、1日平均700名程度が本を借りる(2020年度;新潟市 作成年不明)。2階のティーンズコーナーの書棚に推薦図書・著書あわせて12冊が展示された。1階入口そばにあるエントランスホールの一隅にポスターを展示した。

2.3 分析

3会場にアンケート用紙や回収箱、筆記用具を設置した(図3)。スペースの都合上、アンケートは書籍を展示した書棚の近くではなく、ポスター展示の付近に設置した。アンケート記入場所にスタッフは常駐しなかった。回答数を増やすため、ノベルティとしてブックカバーを自作し、持って帰ってもらえるように複数部を印刷して設置しておいた。アンケートはMicrosoft Formsを用いて電子版も用意しQRコードを掲示したが、ほとんどの回答はアンケート用紙によるものであった(38件の回答中36件)。

アンケートの作成にあたり、レイアウトや分量は大西 他(2023)を参考にし、計11問とした(表



図3 ジュンク堂書店新潟店 (a)・新潟県立図書館 (b)・新潟市立中央図書館ほんぼーと (c) でのポスター展示の様子 (一部)。テーブルをポスター展示の脇に並置し、アンケートの記入・提出場所とした。

3). 回答者を科学・技術への関心によってセグメンテーションするための設問は加納 他 (2013)¹⁾ のものを用いた。この手法では、科学・技術に関心があるか、科学・技術に関する情報を調べることがあるか、調べたときに探している情報を見つけることができたか、を尋ねる3つの多肢選択式の設問に対する回答の組み合わせによって、回答者がセグメント1-6のいずれかに分けられる。このセグメントが、科学・技術への関心層・潜在的関心層・低関心層の3つに分類される(加納 2016)。加納 他 (2013) のセグメンテーションの使用例として加納 他 (2020) や後藤 他 (2014) などがある。人文社会科学系の内容が多い展示内容をふまえると、科学・技術への関心ではなく人文社会科学系の研究への関心に着目するほうが理想的ではあったが、そのようなセグメンテーション手法は開発されていないため、科学・技術への関心を探索的に評価することにした。大学の研究を身近に感じようになったかを尋ねる質問の作成にあたっては坂倉 他 (2012) も参考にした。

3. 結果

3ヶ所で計38件の回答があった：ジュンク堂書店新潟店2件・新潟県立図書館16件(うちWeb回答が1件)、新潟市立中央図書館20件(うちWeb回答が1件)。回答を概観したところ会場による回答の顕著な違いがみられなかった設問については、3ヶ所分のデータをプールして図示した。

回答者の職業は「その他」が多く(79%; 図4A)、内訳は会社員が7件、公務員の記載を含む回答が3件、その他の職に関する具体的な記載を含む回答が3件、パートが3件、主婦が1件、職に関する記載を含まない回答や解釈できなかった回答、空欄が13件であった。主要な対象としていた高校生からの回答は多くは得られなかった。職業を「その他」(30件)もしくは無回答(3件)であった回答者(計33件)のうち年代を回答した方(28件)の多くは40歳代以上であった(73%; 図4B)。新潟大学との関わりについては、卒業生などの直接的な関係者というよりは、関係者ではないが行ったことがあると回答した方が多く半数程度を占めた(47%; 図4C)。回答者を科学・技術への関心度でセグメンテーションした結果、高関心層・潜在関心層・低関心層は、それぞれ73.1%・23.1%・3.8%であった($n=26$)。なおQ8とQ9のいずれかで「わからない」を選択した場合はセグメントに分類されないほか、いずれかの設問への回答がない場合や設問にそぐわない回答がある場合(例：複数項目の選択)など、分類不可だった12件の回答はこの分析から除いた。

回答者の多くは、本展示があることを事前に知っていて見に来たのではなく、会場でたまたま見つけていた(87%; 図5A)。ポスター展示と書籍展示のうち、ポスター展示のみを見た回答者が多く半数程度を占めた(53%; 図5B)。今回はアンケート用紙をポスター展示の場所に設置していたこと、ポスター展示が書籍展示よりも会場入口付近にあったことから、少なくともアンケート回答時にはポスターしか見ていない回答者が多くなった可能性がある。会場ごとに書籍展示とポスター展示の位置関係や規模が異なるため、図5Bでは会場ごとにパネルをわけた。

表3 アンケートの設問.

設問	選択肢
Q1. 「新大ブックフェア 2024」の展示の中で、ご覧いただいたものすべての番号に○をつけてください。	1. ポスター展示 2. 書棚での研究者の著書やおすすすめ本の展示
Q2. 展示を見る前、「新大ブックフェア 2024」の展示があることは知っていましたか？ 以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。	1. 知っていて、この展示を見るために会場にきた 2. 知ってはいたが、どちらかというところの展示はついに見ただけ 3. この展示があることは知らず、会場に来てたまたま見つけた
Q3. 展示を見る前、新潟大学について知っていましたか？ 以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。	1. 自分は新潟大学の関係者（OB・OG含む）なので知っていた 2. 関係者ではないが知っており、新潟大学に行ったことがある 3. 行ったことはないが、なんとなく情報を見聞きして知っていた 4. あまり知らなかった
Q4. 展示を見た後で、新潟大学の研究や研究者に対する親近感に変化はありましたか？ 以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。	1. より身近に感じた 2. 変わらない 3. より遠くに感じた
Q5. (Q4で1または3と答えた方はお答えください。) 親近感に変化があったのは、展示のどの部分がかっかけだと思えますか？ 当てはまるものすべての番号に○をつけてください。	<p>【ポスター展示】 1. 紹介されていたおすすすめの本そのもの 2. 紹介されていた著書そのもの 3. 手書きコメント 4. 研究者の顔写真 5. 顔写真以外の写真 6. 研究内容にかんする文章（『どんな研究？』） 7. 研究者になった理由にかんする文章（『なぜ研究者に？』） 8. 研究と暮らしとのつながりにかんする文章（『暮らしとどう関係する？』）</p> <p>【書棚の展示】 9. 研究者が書いた本 10. 研究者がおすすすめする本 11. 研究者紹介のポップ（顔写真+『どんな研究？』） 12. 手書きのポップ</p>
Q6. そのほか、展示を見た後で新潟大学の研究や研究者への印象に変化があれば、自由にご記入ください。	(自由記述)
Q7. ご自身について教えてください。	1. 小学生 2. 中学生 3. 高校生 4. 高等専門学校生 5. 新潟大学学生 6. 新潟大学以外の大学などの学生 7. 新潟大学教員・研究者（年代：__歳代） 8. 新潟大学職員（年代：__歳代） 9. その他（ご職業：____、年代：__歳代）
Q8. 科学・技術に関心がありますか？ 以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。	1. とても関心がある 2. 関心がある 3. 関心があるともないとも言えない 4. 関心がない 5. 全く関心がない 6. わからない
Q9. 科学・技術に関する情報を積極的に調べることはありますか？	1. はい 2. いいえ 3. わからない
Q10. 過去、科学・技術に関する情報を調べた際に、探している情報を見つけることができましたか？ 以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。	1. 見つけられた。大抵、その内容は容易に理解できる。 2. 見つけられた。しかし、ほとんどの場合、その内容を理解することは難しい。 3. 見つけられなかった。ほとんどの場合、探している情報は見つけられない。 4. わからない
Q11. その他、展示について感想やコメントがあれば、自由にご記入ください。	(自由記述)

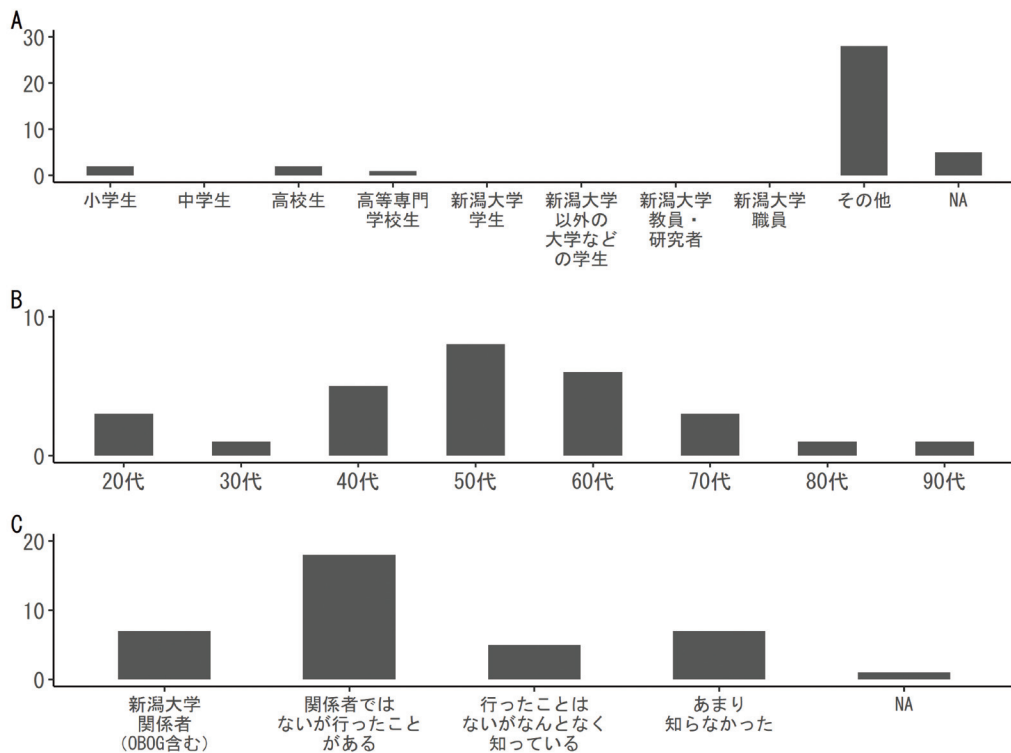


図4 (A) 設問「Q7. ご自身について教えてください。」への回答 ($n=38$). (B) 職業について「その他」を選択したか無回答であった回答者のうち、年代の記入があった回答 ($n=28$). (C) 設問「Q3. 展示を見る前、新潟大学について知っていましたか? 以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。」への回答 ($n=38$). 縦軸は回答数を示す. 「NA」は無回答を示す.

全体として6割程度の回答者が展示を見たことで研究者への親近感が増したと回答した(61%; 図6). データを概観すると、どの展示(ポスター展示、あるいは書籍展示)を見たか(図6A)や、会場の違い(図6B)によって、研究や研究者に対する親近感の変化に違いがみられる可能性があるが、回答数が少ないため統計的検定は用いなかった. 展示を構成する要素(例:手書きコメント・顔写真…)のうち、研究や研究者への印象変化に影響を与えたものを尋ねる設問も含めたが、設問がややこしく回答者に誤解を招いた可能性があった. 具体的には、本設問ではポスター展示・書籍展示を構成するいくつかの要素を選択肢として並べたが、先の設問でポスター展示のみ見たと回答した回答者が、見ていないはずの書籍展示を構成する要素を選択するケースや、逆に書籍展示のみ見たと回答した回答者がポスター展示を構成する要素を選択するケースがあった. 図7はこのようなケースを除いて図示した.

4. 考察

分析したアンケートの回答38件のうち書店で収集したものは2件しかなかったため、以下では公共図書館を中心に考察する(全体の回答者数が少なく、本稿は予備的分析をまとめたものであることから、書店のデータは除外しなかった). 回答者の6割程度が展示を見たことで研究や研究者

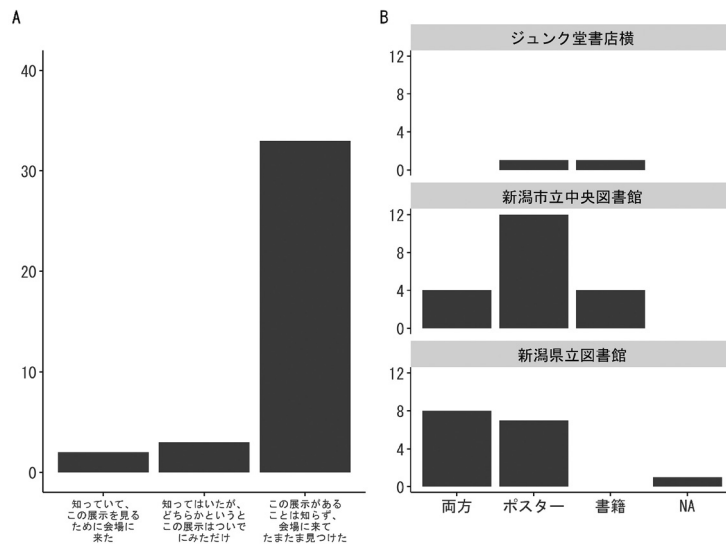


図5 (A) 設問「Q2. 展示を見る前、「新大ブックフェア2024」の展示があることは知っていましたか？以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。」への回答 (n=38). (B) 「Q1. 「新大ブックフェア2024」の展示の中で、ご覧いただいたものすべての番号に○をつけてください。」への回答 (n=38). 会場ごとにパネルをわけた. 選択肢は「1. ポスター展示」・「2. 書棚での研究者の著書やおすすめ本の展示」であり、両方を選んだ回答を「両方」とした. 縦軸は回答数を示す. 「NA」は無回答を示す.

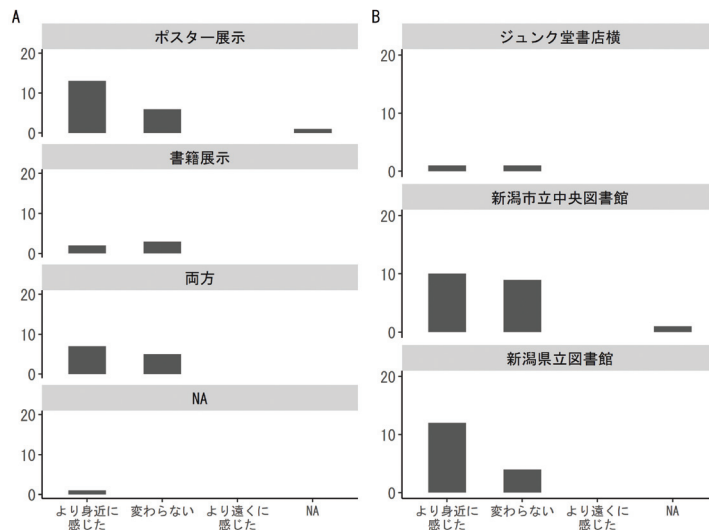


図6 設問「Q4. 展示を見た後で、新潟大学の研究や研究者に対する親近感に変化はありましたか？以下の選択肢の中から最も近いものを1つだけお答えください。」への回答 (n=38). 縦軸は回答数を示す. 「NA」は無回答を示す. (A) 見た展示ごとにパネルを分けた. (B) 回答場所ごとにパネルを分けた.

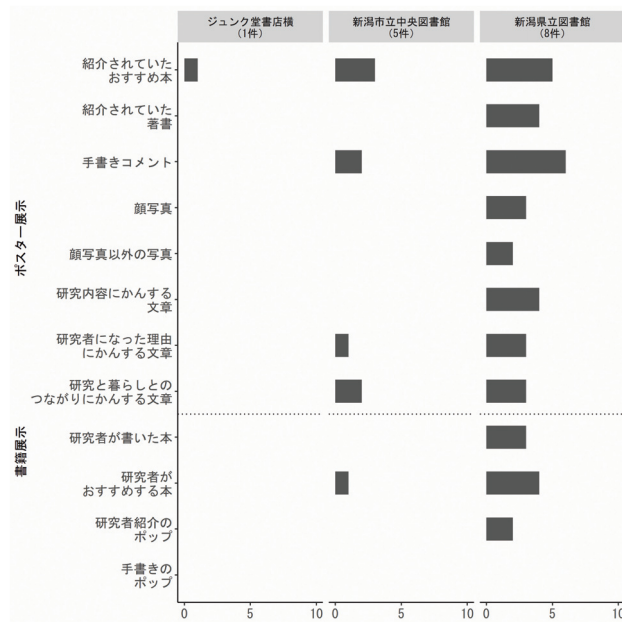


図7 設問「(Q4で1または3と答えた方はお答えください。) 親近感に変化があったのは、展示のどの部分がきっかけだと思いますか? 当てはまるものすべての番号に○をつけてください。」への回答 (n=14). 縦軸の項目のうち、上から8つがポスター展示についての、その下4つが書籍展示についての項目である. 横軸は回答数を示す (ただし複数回答可).

をより身近に感じたと回答した. 回答数が少なく, 統計的検定は行っていないが, 会場ごとにデータを見ると, より身近に感じたと回答した回答者の割合は, A0サイズのポスターを展示した新潟県立図書館 (16件中75%) のほうが, A3サイズのポスターを展示した新潟市立中央図書館 (20件中50%) よりも高かった. 展示のどの要素が有効だったのかを探る設問からは十分な結果は得られなかったものの, ポスター展示の要素 (紹介されていたおすすめ本, 手書きコメントなど) を選択した回答者も一定数みられること (図7) も加味すると, 少なくともポスター展示には一定の効果があつたのではないかと推測される. 図書館は科学・技術に関心の低い層も比較的訪れる文化的施設であるが, 科学・技術に関心の低い層は書籍を読む習慣があまりないと考えられる (早川 2014). 書籍以外の形態の展示があることで, こうした層にも関心をもってもらえる可能性がある. 入口付近にポスターを展示することで, 書籍ポップと同様に, 書籍展示を見る人の増加に寄与した可能性もある (辻本 他 2021). 安光 (2022) は大学図書館に所属教員等の推薦図書を展示し, 展示に対する学生のコメントをテキストマイニングによって分析することで, 展示に含まれる要素がどのように受け止められたかを調べた. 同様の手法を取り入れることで, 展示の効果を詳細に調べることができるだろう. 書籍展示のみを見た方の回答は少なかったことから, 書籍展示の効果はわからなかった. 今回はポスター展示の前にアンケートを設置したが, 今後は書籍展示の効果も調べられるように調査を計画する必要がある. 展示書籍は専門的な内容のものから一般的な内容のものまで幅広く含まれていたため, 書籍の種類ごとに鑑賞者に異なる影響を与える可能性も加味する必要がある.

回答者の多くは新潟大学の関係者ではなかったことから, 地域の図書館で展示することで大学関係者以外の地域の方にも展示を見てもらえたと考えられる. また回答者の多くは会場に来てたまた

ま展示を見つけたことから、地域の人々の生活圏で展示を実施したことで、研究や研究者に目を向けてもらう機会をつくることができたと考えられる。北海道大学が書店にて実施した参加型の展示は、科学・技術を日常生活に重ねて考えられるように構想された(奥本 他 2022, p74)。このような市民の生活に埋め込む参加型展示には、従来のサイエンスカフェなどには立ち寄らない人が参加しやすくなるという利点もある。実際、アウトレットモールにて実施した事前申込のない科学ワークショップの参加者は、科学・技術への関与が低い層も比較的多かった(後藤 他 2021)。一方で、多くの回答者が会場に来て展示を偶然見つけたという結果(図 5A)は、今回の展示による図書館への来館促進の効果(例:長神 2009)は小さかったことも示唆する。展示の周知のために地域の新聞社に取材を依頼したほか(新潟日報社 2024)、新潟大学附属図書館や公共図書館の SNS (X) からは随時情報を発信してもらった(例:新潟大学附属図書館 2024)が、周知方法には検討の余地があるかもしれない。

回答者の多くは科学・技術への高関心層であった(「高関心層」:「潜在関心層」:「低関心層」=73.1%:23.1%:3.8%; $n=26$)。加納 他 (2020) はサイエンスカフェ 10 回分の参加者を同様に分類し、「高関心層」:「潜在関心層」:「低関心層」=84.2%:15.8%:0.0%であったことを報告した($n=133$)。一般市民向けのポスター展示においてシチズンサイエンスに関する調査をおこなった一方井 他 (2020) では、アンケート回答者のうち「高関心層」:「潜在関心層」:「低関心層」=72.2%:23.3%:0.0%であった(分類不可が 4.4%であった; $n=90$)。これらのイベントでは高関心層への偏りが大きい一方で、加納 他 (2020) はサイエンスとアートの融合イベントの参加者を同様に分類し、「高関心層」:「潜在関心層」:「低関心層」=51.5%:43.2%:5.3%であったことを報告している($n=303$)。本稿の結果は、回答者数が少ないこと、鑑賞者の総数が不明なため回収率が計算できないこと、本取組は人文社会科学系の内容が主であったこと、といった要因によりこれらの過去の事例との比較は困難であった。公共図書館における展示がどのような市民層の関心を集めやすいのかについては今後の検討に値する。なお人文社会科学系の科学コミュニケーションにおいても科学への関心が低い市民層に向けた取組みもみられるものの(小林 2024)、実際に参加者の関心層割合を調べた例はなく、本研究と直接、比較可能な研究はない。なお興味深い例として、前波 他 (2013) は、歴史や芸術、文化など多岐にわたる分野の内容を含む大学公開講座の参加者を対象に、科学・技術への関心度にもとづくセグメンテーションを行っている。人文社会科学系の科学コミュニケーションの参加者を対象とした今後のさらなる研究が求められる。

市民が学術と接点をもつ場としての図書館や、社会のナレッジマネジメントに携わる人材としての図書館員との協働による科学コミュニケーションには大きな可能性がある(長神 2008)。実際に、書棚の飾り方は各書店・図書館ごとに工夫が凝らされ特色が表れていたのが印象的であり、各会場図書館のスタッフの方々には今後の展示の糧となる現場の声を多くいただいた。アートとの融合イベントが芸術スキルを有するスタッフを必要とすることに比べ、書籍は図書館が取扱い可能なものであり、アート作品とくらべればポップ・ポスター作成は一般的にハードルが低いものと思われることから、書籍に注目した展示はより多くの機関で実施しやすいという利点がある。本研究は大学外の施設と連携した取組であり、実験環境のような厳密な統制は難しく、アンケート手法においても改善の余地があり、予備的な結果であったかもしれない。しかし、地域の一般の方を対象にした展示では大西 他 (2024) がアンケートの結果を報告しているほか調査の報告例はほとんどない。研究機関が普段どのような研究をしているのかを発信することは、とくに成果が出るまでに時間のかかりやすい基礎研究においてはある種の「説明責任」でもあり(初田 他 2021)、同様の取組みは今後も一定の役割を果たすだろう。本稿はその発展のための足場の一つとなることが期待される。

謝辞

本調査にご協力いただいたジュンク堂書店新潟店・新潟県立図書館・新潟市立中央図書館のみなさまに深く御礼申し上げます。新潟大学の先生方、新潟大学学術情報部、新潟大学経営戦略本部 UA室をはじめ本取組にご協力いただいたみなさまにもこの場を借りて御礼申し上げます。英文タイトル・要旨はPaperpal プライム無料トライアル (Editage 社) を用いて校正した。

注

- 1) なお加納 他 (2013) の手法のもとになっている、Victorian Department of Innovation による報告書は、本稿の執筆時点でアクセスができず確認できなかった。

文献

- 新垣紀子・都築幸恵 2009: 「人は手書き文字をどのような次元で認知しているのか?」『成城大学社会イノベーション研究』 4(2), 27-43.
- 浅井理紗・手島恵里・水口充 2015: 「手書きポップを用いた図書推薦支援ソーシャルネットワーキングサービス」『エンタテインメントコンピューティングシンポジウム 2015 論文集』, 68-71.
- 坂東隆宏・福原舞・小菅晃太郎・鈴木昂太・笠嗣瑠・奥本素子 2015: 「科学への関心が低い層を対象とした Web サイト『研究者時計』の作成・公開結果: 楽しく科学者を紹介する試みについて」『科学技術コミュニケーション』 18, 17-30.
- Cambridge University Press and Oxford University Press 2019: "Researchers' perspectives on the purpose and value of the monograph".
- 後藤靖宏 2013: 「書店 POP 広告のフォントと“見出し”が書籍への注意と評価に与える影響」『2013 年度日本認知科学会第 30 回大会発表論文集』 306-313.
- 後藤靖宏 2014: 「書店 POP 広告の感情語とフォントが書籍の評価に与える影響」『2014 年度日本認知科学会第 31 回大会発表論文集』 805-813.
- 後藤崇志・加納圭 2021: 「商業施設での科学ワークショップの参加者層評価 科学への関心・意欲の多様な層のワークショップ参加を目指した試み」『日本教育工学会論文誌』 45(1), 113-126.
- 後藤崇志・工藤充・水町衣里・加納圭 2014: 「科学・技術イベント参加者層評価に豪州発セグメンテーション手法を用いることの有効性」『科学技術コミュニケーション』 15, 17-35.
- 初田哲男・大隅良典・隠岐さや香 (柴藤亮介 編) 2021: 『役に立たない』研究の未来 柏書房.
- 早川雄司 2014: 「国民の科学技術に対する関心と科学技術に関する意識との関連」文部科学省 科学技術・学術政策研究所 第 2 調査研究グループ.
- honto 作成年不明: 『店舗詳細 ジュンク堂書店 新潟店 / MARUZEN 新潟店 (文具)』 https://honto.jp/store/detail_1570038_14HB320.html, (2024 年 12 月 16 日 閲覧).
- 池田まさみ・渡邊淳司 2016: 「基礎心理学とサイエンス・アウトリーチー心の実験パッケージ開発委員会の活動を通して」『基礎心理学研究』 35(1), 72-78.
- 一方井祐子・小野英理・宇高寛子・榎戸輝揚 2020: 「シチズンサイエンスへの参加意欲と科学・技術に対する関心の関係」『科学技術コミュニケーション』 27, 57-70.
- 科学技術振興機構: 『JST-news』 <https://www.jst.go.jp/pr/jst-news/>, (2025 年 11 月 7 日 閲覧).
- 加納圭 2016: 「戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 「科学技術イノベーション政策のための科学研究開発プログラム」研究開発プロジェクト 「STI に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計 (PESTI=ペスティ)」研究開発実施終了報告書」.
- 加納圭・水町衣里・一方井祐子 2020: 「科学イベントへの参加意向と実際の参加者層の分析—「サイエンスカフェ」と「サイエンスとアートの融合イベント」との比較—」『科学教育研究』 44(4), 254-260.
- 加納圭・水町衣里・岩崎琢哉・磯部洋明・川人よし恵・前波晴彦 2013: 「サイエンスカフェ参加者のセグメン

- ーションとターゲティング:『科学・技術への関与』という観点から』『科学技術コミュニケーション』13, 3-16.
- 荻谷剛彦 2020:「学者は一それでも一なぜ本を書くのか: 研究評価と学術書」『大学出版』121, 1-6.
- 小林真也 2024:「人文科学のサイエンスコミュニケーションを目的とした謎解きゲームの開発と実践」『日本デジタルゲーム学会 年次大会 予稿集 第14回 年次大会』148-152.
- 前波晴彦・清水克彦 2013:「アンケート分析に基づいた公開講座の現状と受講者像」『鳥取大学教育研究論集』3, 37-48.
- 松本功 2020:「研究出版の現在とこれから—研究書出版はいきのびることができるか—」『日本近代文学』103, 102-109.
- 三中信宏 2021:「読む・打つ・書く 読書・書評・執筆をめぐる理系研究者の日々」東京大学出版会.
- 光平有希 2023:「〈エッセイ〉『はなす』『ひらく』『つながる』情報発信の模索から」『日文研』68, 2-6.
- 文部科学省 2023:『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』, 6-7.
- 文部科学省 2025:『科学技術・学術審議会 人材委員会 次世代人材育成 WG (第4回) 資料1-3 科学技術コミュニケーションに関する現状・課題・今後の具体的な取組 (案)』.
- 長神風二 2008:「サイエンスコミュニケーションと図書館」『情報管理』51(5), 321-333.
- 長神風二 2009:「つながりあう企画—脳カフェと図書館展示が連動する」『Brain and Mind』10, 16-17. <http://www.brain-mind.jp/newsletter/brain-and-mind-10.pdf>, (2024年12月9日閲覧).
- 日本学術会議第4部 2005:『第4部報告 科学・技術を文化として見る気風を醸成するために』.
- 新潟大学附属図書館 2024:「新大ブックフェア2024 一本で身近に。大学の研究—」『X』2024年10月22日, <https://x.com/NiigataULib/status/1848623804123386360>, (2024年12月4日閲覧).
- 新潟大学 URA 2024:『新大ブックフェア2024 開催!』 <https://www.ura.niigata-u.ac.jp/2024/09/20/6021/>, (2025年11月7日閲覧).
- 新潟県立図書館 2024:『令和6年度新潟県立図書館年報』.
- 新潟日報社 2024:「研究者“推し本”ずらり 市内図書館などでフェア」『新潟日報』2024年11月29日, 朝刊, p. 10.
- 新潟市 作成年不明:「令和2年度新潟市立図書館利用統計 (CSV:1KB)」クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 2.1 日本 (<https://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> (外部サイト)) (2025年1月16日閲覧).
- 新潟市立中央図書館 作成年不明:『公の施設【基本情報】』 <https://opac.niigatacitylib.jp/mokuhyo/01chuo.pdf>, (2024年12月16日閲覧).
- 小川達也 2023:「第9章 博物館」廣野喜幸・藤垣裕子・定松淳・内田麻里香(編),『科学コミュニケーション論の展開』東京大学出版会, 157-175.
- 奥本素子・種村剛 2022:「まだ見ぬ科学のための科学技術コミュニケーション—社会との共創を生み出すデザインと実践—」共同文化社.
- 大窪善人・百木漠・中森弘樹・浅野直樹・積田俊雄 2013:「人文・社会科学における科学コミュニケーションの実践—京都アカデメイアを事例として—」NPO 法人 京都アカデメイア・ウェブページ. <https://kyoto-academeia.sakura.ne.jp/2020b/wp-content/uploads/2021/01/kagakucommunication.pdf>, (2025年1月21日閲覧).
- 大西将徳・藤田弥世・白井哲哉・奥田将基 2023:『京都大学アカデミックデイ2022 報告書』.
- 大西将徳・藤田弥世・福田将矢・飯田圭輔・榎本万理野・奥田将基 2024:『京都大学アカデミックデイ2023 報告書』.
- 理化学研究所 作成年不明:『プロジェクト報告—科学道100冊フェア—』 <https://www.riken.jp/pr/kagakudo100/fair/index.html>, (2026年1月5日閲覧).
- サイエンスカフェにいがた 作成年不明: <http://www.ecosci.jp/n-cafe/>, (2025年1月8日閲覧).
- 坂倉真衣・三島美佐子・飛松省三 2012:「研究者の『子ども時代』に焦点を当てた展示の有効性」『科学技術コミュニケーション』12, 75-91.

- 佐藤郁哉・芳賀学・山田真茂留 2011: 『本を生みだす力 学術出版の組織アイデンティティ』 新曜社.
- 佐藤侑太郎・李香丹 2025: 「研究成果を広めるために—地域で育む『新大ブックフェア』」『大学出版』142, 11-15.
- 春風社編集部 (編) 2022: 『わたしの学術書—博士論文書籍化をめぐる』 春風社.
- 鈴木哲也 2020: 『学術書を読む』 京都大学学術出版会.
- 鈴木哲也・高瀬桃子 2015: 『学術書を書く』 京都大学学術出版会.
- 橘宗吾 2016: 『学術書の編集者』 慶応義塾大学出版会.
- 辻本友紀子・松見淳子 2021: 「環境操作が書店における来店者のブックフェアへの接近行動に及ぼす効果—看板およびPOP広告を用いて—」『関西学院大学心理科学研究』47, 35-41.
- 内田麻理香・長神風二・佐倉統 2011: 「サイエンスコミュニケーションのプロセスを可視化するイベント設計: 「対決!サイエンス大喜利」の実践事例」『科学技術コミュニケーション』9, 82-92.
- 安光裕子 2022: 「ある大学図書館の企画展示を学生はどう受け止めたか—テキストマイニングの手法を用いた学生のコメントの分析—」『山口県立大学学術情報』15, 83-88.
- 渡邊洋子 2017: 「〈巻頭エッセイ 1〉 読書と学び: 本との出会いを考える」『京都大学生涯教育フィールド研究』5, 1-10.